

ノーモア・ヒバクシャ通信 第9号

発行 2013年6月6日

ホームページ <http://www.kiokuisan.jp/>

ブログ

<http://tks-forum2011.blog.ocn.ne.jp/hibakusha/>

発行者 ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会
〒102-0085

東京都千代田区六番町15プラザエフ6F
Tel/Fax 03-5216-7757 (直通)

Email hironaga8689@gmail.com

郵便振替口座 00170-5-694752

(口座名義) ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産基金

この時期にしては降雨が少なく夏日が続いていますが、皆さまにはいかがお過ごしでしょうか。今通信は、主に5月に開催した第1回通常総会について、ご報告します。

★もくじ

I. 第1回通常総会のご報告	P 1
II. 第3回理事会・臨時理事会のご報告 オスロ会議の報告	P 3
III. 第4回資料センター検討委員会のご報告	P 4
IV. 2013語り・受け継ぐ交流集会のご報告	P 5
V. 資料の収集、整理の作業から	P 6
VI. 「“ノーモア・ヒバクシャ”を実現するために」実行委員会（仮称） 開催のご案内	P 7
VII. 継承の取り組みの紹介(第2回) 東京都 町友会とともに生きる会、鳥取県 紙芝居で原爆を伝える	P 8
VIII. 本のご紹介 ベンガル語の被爆証言集『広島の声』	P 10

I. 第1回通常総会のご報告

5月18日(土)午後1時～2時45分、東京四谷主婦会館プラザエフ 地下2階「クラルテ」でNPO法人として最初の通常総会が開催されました。正会員総数227名、出席正会員数117名(実出席33名、書面議決66名、委任18名)のもと、審議事項(第1号議案 2012年度事業報告承認の件、第2号議案 2012年度決算承認の件、監査報告、第3号議案 役員選任の件)について6名が発言し、賛成多数で承認されました。また、報告事項(2013年度事業計画及び予算:理事会議決事項)についても7名が発言し、討議を深めました。この会のめざすもの、会員の意見反映や運営参加、事務局の実務などについて、率直な意見が出されました。NPO法人化後初めての総会で、運営のあり方にとまどいや反省すべき点もありました。ご意見や反省点を今後活かしていきます。

この会の活動もNPO法人化して2年目を迎え、少しずつ軌道に乗りつつあります。昨年度は、広島、長崎の原爆資料館をはじめ関係施設や関係者への訪問、面談も一巡しました。その中で、この会のネットワークの輪が広がりつつあります。また、日本被団協の資料をはじめ、被爆者運動史関係の資料収集も始まりました。これから専門家による資料整理や文献整理に入ります。それらの受け皿となり、継承活動の拠点となる「資料センター（仮称）」の青写真の検討にも入りました。そして、被爆70年に向け、被爆者と若い人たちが語り合う場を数多くつくり、被爆者の皆さんの体験と願いを聞き取り受け継ぐ取り組みを、大きく広げようとしています。以下に、議事の概要をご報告するとともに、2013年度の事業計画及び予算を掲載いたします。

（議事の概要）

- （1） 冒頭、原爆犠牲者のご冥福と、病床にある被爆者の皆様のご快癒を祈り、黙祷を捧げました。
- （2） 議長選任、書記任命、議事録署名人選任ののち、岩佐幹三代表理事より挨拶を行いました。（＊別添資料をご参照ください。「NPO法人ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会 第1回通常総会ご挨拶」）
- （3） 田中熙巳日本被団協事務局長より、来賓のご挨拶を受けました。また、平和のための博物館国際ネットワーク代表、ピーター・ヴァン・デン・デュンゲン博士より、メッセージが届いていることが紹介されました。（＊別添資料をご参照ください。「ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会総会へのメッセージ」）
- （4） 審議事項は6名の発言、討議ののち、承認されました。報告事項は、7名の発言で討議を深めました。
- （5） 岩佐代表理事が、役員紹介と閉会の挨拶を行いました。

なお、選任された理事、監事は、次の通りです。（山根和代理事は新任、ほかは再任。）
理事：岩佐幹三氏（日本被団協代表委員）、安齋育郎氏（立命館大学名誉教授）、池田眞規氏（弁護士）、中澤正夫氏（医師）、有原誠治氏（映画監督）、大久保賢一氏（弁護士）、聞間元氏（医師）、内藤雅義氏（弁護士）、直野章子氏（九州大学准教授、芳賀唯史氏（日本生協連専務理事）、橋本左内氏（宗教者平和協議会相談役）、舟橋喜恵氏（広島大学名誉教授）、安田和也氏（第5福竜丸平和協会事務局長、山根和代氏（立命館大学准教授、「平和のための博物館国際ネットワーク」理事）、吉田一人氏（ジャーナリスト、杉並区原爆被爆者の会幹事）、伊藤和久氏（事務局）。

監事：木村誠氏（司法書士）、田部知江子氏（弁護士）。

II 第3回理事会、臨時理事会のご報告（オスロ会議の報告）

第3回理事会を3月23日に、臨時理事会を4月27日に開催し、この一年間の取り組みを振り返り、新年度の事業計画を検討するなど、通常総会議案を中心に討議しました。

それぞれの理事会では、主に次の諸点が確認されました。

（第3回理事会）

i) 「核兵器の非人道的結末」に関するオスロ会議について大久保理事から報告があった。

（要旨後述）

ii) 「役員選任の件」など総会議案を確定するために、臨時理事会を開催することとした。

（臨時理事会）

i) 新任役員の推薦を含む「役員選任の件」など、総会議案を確認した。

ii) 総会関連企画として、ドキュメンタリー映画「もし、この地球を愛するなら」の上映を確認した。

iii) 資料センター検討委員会との合同討議を確認した。

iv) 被爆70年の聞き取り実行委員会（仮称）の発足を確認した。

v) 資料整理のための物件（愛宕山）の確保を確認した。

（オスロ会議の報告要旨 大久保賢一理事）

3月4日～5日、ノルウェーのオスロでノルウェー政府の呼びかけで、世界から127か国が集まり「核兵器の非人道的結末」というテーマで会議が開かれた。「核兵器の非人道的結末」をどうアプローチで確定させていこうかということで、3つのテーマが話し合われたが、一つは核兵器が使われた場合に何が起きたのかという検証、今後使われた場合に環境や食糧生産にどう影響があるのかというシミュレーション、もう一つは核兵器が使われた場合に対処することができるのかという問題。

核兵器使用の非人道的結末というアプローチをするということは、核兵器の使用を国家の安全保障のために認めるという考え方に釘をさしていくことになることは間違いない。そういうアプローチの仕方をされることに核兵器保有国は耐えられない。このアプローチを強めていく動きとして今回の会議のフォローアップ会議が来年メキシコで開かれる。

反核法律家協会は「広島・長崎の記憶から核兵器も戦争もない世界へ」というアピールを英文にして持ち込み①広島・長崎を記憶すること②核兵器廃絶条約の早期実現③核兵器使用の危険性を低減すること④核兵器国に核軍縮義務を果たさせること⑤核兵器も戦争もない世界を展望すること、この5つの項目を訴えてきた。

この会議の関連でどういう運動をしていくのか。核兵器使用の非人道的結末というアプローチでNATO加盟国が動いている、バチカンが動いている、国際赤十字社が動いている。それらの動きを見すえながら広島・長崎の経験を全体の流れの中に位置づけをしていくことが求められているという印象を持った。

Ⅲ. 第4回資料センター検討委員会のご報告

6月1日(土)午後1時から3時45分まで、東京四谷主婦会館プラザエフ3階 主婦連会議室で、第4回資料センター検討委員会を開催しました。議題と討議の概要は、次の通りです。

(議題)

1. 資料センター構想の「Webサイト」について
2. 基本構想案の作成について
3. 第5回会合の日程について
4. その他

(討議の概要)

「議題1 資料センター構想の「Webサイト」について」、首都大東京の渡邊英徳准教授(システムデザイン学部)からご報告をいただき、それをめぐる質疑・討議を行い、その後、「議題2 基本構想案の作成について」「議題3 第5回会合の日程について」など今後のスケジュールについて討議することとしました。

(1) 資料センター構想の「Webサイト」について

渡邊英徳先生らは、時代の経過とともに散逸していく歴史資料をネットワークを通じて収集し、デジタル・アースの仮想空間に集積して公開する「多角的デジタルアーカイブ」を構築。これまでに、i) 南太平洋のツバル、ii) ナガサキ、iii) ヒロシマ、iv) 東日本大震災、v) 沖縄戦、をテーマとしたアーカイブズ・シリーズを公開してこられました。その画面を実際に見せていただきながら、それぞれの特徴や発展について、お話をさせていただきました。

討議を通じて、継承する会では、被害の実相を伝えるだけでなく、一人ひとりの被爆者の生き方や、その人たちが運動してきたたかひの記録を残し伝えていきたい、それを可視化する可能性に希望をもった旨、同時に、若い人たちとアーカイブをつくりあげていく過程が継承活動になったという点にも教えられた旨、感想が述べられるなど、「Webサイト」の可能性について、さまざまな示唆を受けることができました。

(2) 基本構想案の作成について

「ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産の継承センター(仮称)～「基本構想」作成のたたき台～」が提案、説明され、これをもとに意見を集約し、検討委員会としての原案を作成、理事会に提出することとしました。そのため、次回は6月28日(金)を予定。

IV. 「2013 語り・受け継ぐ交流集会」の報告

日本被団協の定期総会が終了した6月5日(水)午後3時から、東京・御茶ノ水のホテル・ジュラクで、継承する会の「2013 語り・受け継ぐ交流集会」が開かれました。

被爆70年に向けて日本被団協とともにとりくもうとしている「聞き取り」活動について、そのために作成中の「継承ポータル」の画面を実際に見、説明を聞きながら、どのようにすすめていくかを話し合おうと企画したもの。前日からの総会に参加された各都道府県被団協の代表や二世をはじめ首都圏の被爆者、当会の会員ら約50名が参加し、熱心に意見や経験を交流し合いました。

はじめに、継承する会の伊藤事務局長から、被爆70年に向けた聞き取り活動の趣旨について、次のように説明しました。

- 1) この聞き取りは単なる調査ではなく、自らの体験を語り伝えたいと願う被爆者とその体験を受け継ごうとする人たちが出会い、語りあうことのできる場を、できるだけ数多くつくっていかうとするもの。そのためにも、これまで被爆者の話を聞いたこともない若い人たちにできるだけ多く呼びかけ、参加していただきたい。大きなとりくみに広げていくなかで、これまで口を閉ざしていた被爆者にも、一人でも多くその体験を語り始めるきっかけになれば、と考えている。
- 2) 聞き取りの項目や方法については、用意した聞き取り票を共通の手がかりに、それぞれの都道府県やグループで項目を追加したりアレンジしたりして、工夫しながらとりくんでいただきたい。
- 3) 今月29日には、このとりくみをさらに大きく広げていくために、さまざまな団体や個人による実行委員会を発足させる。実行委員会では、その場はもちろんのこと、適宜交流会を開催するなど、それぞれの経験を交流し、学び合う機会も設けていきたいと考えている。
- 4) 聞き取った被爆者の証言の生かし方としては、2015年のNPT再検討会議に届けるほか、それに向けた国内外の世論づくりや、対政府交渉に生かすことを考えている。さらには、継承する会の記憶遺産の一環として保存、活用していきたい。将来的には、Web上での公開など、よりよい生かし方も、みなで工夫し考え出していくことができるだろう。

つづいて、高校生の頃から長崎で、1万人署名運動や高校生平和大使などの平和活動に取り組んできた被爆三世、草野史興さんが、作成中の「継承ポータル」=インターネットを用いて、体験を語り伝えたい被爆者たちと被爆者の話を聞き受け継ぎたい人たちを広くつなげるしくみ・情報のひろば=について、実際にスクリーンに映し出しながら説明。安全性(セキュリティ)の問題や証言する際の費用負担、証言の質を向上させる課題など、参加者からの質問や意見に答えながら、被爆者の話を聞きたいがどこへ連絡してよいか分からないという人たちがつなげるよう、まずは日本被団協や各都道府県被団協(伝える側)に登録していただき、皆さんの意見を入れながら、より質の高い、使いやすい道具にしていきたい。そし

て行く行くは聞きたい者どうしがつながって、さらに次代へとつないでいけるようにしていきたい、と述べました。

後半の交流会では、「当時の広島・長崎の地図をもっていくと話がはずんだ」（福岡）、「プロのカメラマンの協力をえて、私が話を引き出しながらDVDに撮り始めている」（宮城）、「体験したことを絵にしてみよう、ととり組んでから、出版、紙芝居、英訳、映像…へと発展してきた」（神奈川）、「あの時のことは絵にならない。亡くなった人たちへのせめてもの気持ちから、きれいに描かれている」（東京）が、そうした点を補いながら「絵を見せて語ると、よく分かってもらえる」（東京）など、各地の被爆者から創意的な語り継ぎの経験が語られました。

また、「県内高校生の《ピース・ウィング》をきっかけに、丸木美術館と被爆者の会がつながった」（埼玉）、「原爆展のため、二世が写真を撮り話を聞く企画がすすんでいる」（東京）、「被団協の聞き書き・語り残し運動の呼びかけ以来、毎年ではないが、節目節目でとりくみ証言集を発行してきた。70周年に向けては、二世の会で活動方針にも入れている」（長崎）など、二世や若い人たちへの広がりも紹介されました。

「聞き取りは聞きっぱなしになりがち。今回の聞き取り票の最後に聞いた人の感想を書く欄があるが、聞いた後で感想を述べ合い、ディスカッションしていくなかで継承につながっていく」（埼玉）という指摘も、生かしていきたいものです。

最後に、草野さんが再度「継承ポータル」を次の世代に伝えていく意味のあるものにしていきたいと発言。吉田理事が「被爆者運動は世界にひとつしかない。この会は、被爆者が60年、70年、命をかけて運動してきたものがそのままなくなってしまうように、被爆者が何を求め、どう生きてきたのかを引き継いでもらう取り組みだ。被爆者にとっては、自分自身の人生と運動を遺すことでもある」と締めくくり、各県、参加者の協力を呼びかけました。

V. 資料の収集・整理作業から

被爆者のたたかいを後世に伝える——被爆者運動関係資料の収集・整理は、日本被団協所蔵の資料（すでに段ボール50箱余り）を軸に整理作業が始まろうとしています。

同時に、草創期の運動資料は少なく、それを担った個人や関係者からの資料収集作業も進めていますが、これはなかなか困難なのが実情です。

5月末、兵庫県の千葉孝子さんから、お母さんの故・副島まちさんの遺された資料が届きました。副島さんは、被団協結成直後からの代表理事。兵庫県の会をつくり長年相談活動を担いながら、海外への遊説にも参加されました。段ボールの中には、県被団協発行の証言集のほか、1951年からの手帳が41冊も。そこには諸行動の記録だけでなく、子どもの学校のこと、病気のことなども記されていて、被爆者運動の先頭に立ちながら子どもを育てる一人の母親の心配や息遣いも聞こえてくるような気がします。

運動の記録、といってもそれは、被爆者がさまざまな苦悩を抱えながら反原爆のたたかいに立ち上がっていった一人一人の人間の記録でもあります。こんな貴重な資料を待っています。

VI. 「“ノーモア・ヒバクシャ”を実現するために」実行委員会（仮称）開催のご案内

「あの日」から68年目の夏を迎えようとしています。

ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会では、昨年夏に開催したNPO法人ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会設立記念集会「核時代を生きる～今こそヒバクシャの声を世界に・未来に～」を、多くの人たちのご協力・ご参加で成功させることができました。

集会後、9月に開催した「核時代を生きる」集会の実行委員会で振り返りの会合では、「被爆70年に向けて、被爆者と非被爆者が一緒になって被爆者の声を集め、それをNPT再検討会議、国連に届けることも継承の取り組みとして考えられるのではないか」「この集まりを継続させて、継承とはどういうことかをみんなで考える場にしたい。被爆者と非被爆者、特に若者が一緒に取り組むことが大切」という声がありました。

その後、取り組みを具体化するために11月、1月、3月と「核時代を生きる」懇談会を重ね、2月には「学習懇談会④被爆70年の取り組みについて考え合う～1977NGOシンポの一般調査に学ぶ（濱谷正晴先生）」を開催。①被爆者とその思いを受け継ごうとする人たちが語り合う場を数多くつくり、被爆者一人ひとりの声を「聞き取り」の形で集約し、次の世代や世界に継承する。②その声を2015年のNPT（核兵器不拡散条約）再検討会議に届けるなど、さまざまなステージにおいて活用し、核兵器廃絶への国際世論を高めることにも反映させることが話し合われ、そのための聞き取り票のひな形をつくりました。

すでに埼玉ではこの聞き取り票を使って聞き取りがはじまり、東京では平和ゼミナールの高校生たちが聞き取りの準備を進めています。

このたび下記の日程で「“ノーモア・ヒバクシャ”を実現するために」実行委員会（仮称）を立ち上げて、多くみなさんと協力して、この取り組みを大きく広げていきたいと考えています。何かとお忙しいとは存じますが、ぜひご参加くださいますようお願いいたします。

出欠につきましてはメールまたはFAXにてご連絡ください。

記

名称：「“ノーモア・ヒバクシャ”を実現するために」実行委員会（仮称）開催のご案内

日時：2013年6月29日（土）13：30～16：30

場所：プラザエフ5F第1会議室（JR四ツ谷駅下車 麴町口で徒歩すぐ）

VII. 継承の取り組み紹介(第2回)

（東京都 町友会とともに生きる会、鳥取県 紙芝居で原爆を伝える）

「通信」では、各地で継承に取り組む受け継ぎ手の声、被爆者の声を紹介していきます。

第2回目は、若い世代の受け継ぎ手として東京都町田市で「町友会とともに生きる会」の景山愛子さんと、鳥取県の平家六栄さんからレポートを寄稿していただきました。

(1) 町友会とともに生きる会

この地域とともに

影山 愛子

私は3年ほど前から「町友会とともに生きる会」（以下「生きる会」）に入り、活動を始めました。この会は、地元東京都町田市の被爆者団体「町友会」を支援する市民の会です。私がこの会に入ろうと思ったきっかけの一つに、西野稔さんという被爆者の方との出会いがありました。大学を卒業して、数年たち仕事にもなれてきた頃、近隣大学主催の地域住民向け講座に平和・ヒバクについて学ぶものがありました。当時、社会教育関係の仕事で平和講座を担当していたこともあり、受講しました。

そこで、講師として被爆体験をお話に来てくださっていたのが、長崎での被爆体験をもつ西野さんでした。私にとって、被爆者の方のお話を直接聞くのは初めてでした。しかし、当時の私が西野さんのお話をどれ程聞き取ることができたのであろうか、と疑問に思うほどその内容を理解することはできませんでした。

その後、講座を通して西野さんとお会いする機会がありました。改めて自己紹介を交えながら、少しずつ、何気ない話から当時体験のことを折にふれ聞くことができました。だんだんお会いする機会が増えていくと、西野さんのお話は自分のおじいちゃんから聞いているお話のような、より身近なものとして聞くことができました。夏の暑い日に登戸研究所へ行った時は、酸素ボンベを引いて参加をしていました。ご自身も当時のことを知りたいから、とおっしゃっていたと思います。

合宿と称して丸木美術館へ行き、近くの施設で泊まることになりました。夜、ロビーで少し呑みながら談笑している時、西野さんから「私は戦後、銀行員として働いてきて、被爆のことを振り返ってこなかった。ようやく今になって、被爆体験を次の世代に引き継いでいきたいと思っています。どうか一緒に協力してくれませんか？」という話がありました。私は何も言うことができませんでした。その後、講座企画者の方の異動もあり、西野さんとお会いする機会もなくなりました。あの時、西野さんの言葉に何も言うことができなかったことを、今でも悔やむことがあります。

数年経ち職場の先輩を通じて、「生きる会」のことを聞き、参加することにしました。私にとっては、自分が暮らす地域で、もう一度きちんとやり直せるのではと思えるいい機会でした。なかなか会員が集まらない焦りや活動の方向性を模索するとき、難しさを感じます。しかし、町友会の方とも直接お会いしながら、共に活動をしていくことができることができます。年末お見舞いや会議など、一緒に活動をさせていただくなかで、気づくことが多くあります。これから、被爆体験を自分達がどう受け継いでいけるのか、会員同士で話し合い、アクションを起こしていこうと動くこと、大変ではありますが、大切にしていかななくてはいけ

ないと思っています。

〔編集部注：西野稔さんは2010年9月3日、肺気腫のため亡くなりました。(享年78歳)〕

【連絡先】町友会とともに生きる会へのご連絡は継承する会事務局宛てにお送りください。
転送いたします。

(2) 紙芝居で原爆を伝える

平家 六榮

文書の掲載は有難うございます。ことし七十五歳です。紙芝居はかなりの道具ですが、がんばって出かけますのでお声をかけてください。

漫画「はだしのゲン」(全10巻)の作者中沢啓治さんが昨年12月19日に亡くなりました。丁度その日、わたしは居住地の久松小学校で恒例となっている6年生を対象にした紙芝居「はだしのゲン」(全5巻)を上演していました。

この紙芝居は久松以外でも紹介をいただき県東部地区の小学校9校で行ってきました。被爆者の方から「鳥取では小学校の修学旅行にヒロシマ行きがなくなって久しい」と聞いた覚えがありますが、最近の情報では鳥大付属小で毎年4月平和学習月間と称しヒロシマへ行っているとのことでした。

紙芝居「はだしのゲン」は絵本でも同名の低学年・年長組用があり、これは発行元の了承を得てPCスライド化しプロジェクターで投影して朗読し、保育園・学童保育などへ広範囲にでかけております。特に地域公民館で小学生と高齢者が共同で鑑賞した折、涙をぬぐう老婦人をじっと見つめる幼児の姿が忘れられないだけでなく、これが「語り継ぐ」ということなのかと肌に沁みました。

私は故中沢啓治さんを直接には存知あげませんが同級生年齢で、終戦のとき国民学校一年生でした。今秋民生児童委員も定年となりますので、これから地域高齢者の交流会へ平和紙芝居を持っていっそう参画してまいる決意です。

これまで県外では、尼崎、広島の平和のための戦争展、他に豊岡市のたじま医療生協診療所でも「はだしのゲン」の紙芝居を上演しました。

この外にも「原爆の子さだ子の願い」の紙芝居は主人公と同年代の小学生の共感は強いものがあります。

「はだしのゲン」の紙芝居の所要時間は約80分、絵本は40分、「さだ子の願い」の紙芝居は15分です。

どうぞご紹介願います。

今年、岡山県の津山市、県内の米子市と連携し、鳥取でも「女優たちによる朗読『夏の雲は忘れない』ヒロシマ・ナガサキ1945年」公演実行委員会を立ち上げ、鳥取市の後援を受けたほか、鳥取市非核平和都市宣言30周年協賛事業として支援を受けることとなり、幅広い動員運動にしたいと取り組んでおります。

公演には日色ともゑさんら6人の女優のほかに5人の現地中高校生も出演します。先日、鳥取公演の現地出演者の事前指導のため日色ともゑさんが鳥取に見えました。男子中学生一人、高校演劇部の女子高生四名、計五名は「夏の雲」のシナリオを読んだ後、広島・長崎へ行ったことがないだけでなく、被爆体験文集に触れたのも初めてだと日色さんをスッカリ驚かせていました。指導が終わったあと茶話会をしたのですが、男子中学生に付いて来ていたおばあちゃんが「わたし長崎の被爆者なの」と被爆体験を語り始め、これまた参会者十六名がすっかり引き込まれてしまいました。孫の男の子も初めて聞いたと目をしばたせていました。

どうか「夏の雲～」チケット普及にご協力願います。

【連絡先】 平家六栄 携帯090-3372-8121 メール heike6ei@docomo.ne.jp

Ⅷ. 本のご紹介 ベンガル語の被爆証言集『広島の声』が完成

このほど、被爆証言集『広島の声』が出版されました。

バングラデッシュから日本に来て、在日22年、現在は在日外国人のためのメディア「ビベックバルタ」の編集者として活動しているP.R.プラシドさんと、八王子市原爆被爆者の会事務局長の上田紘治さんとが力を合わせ、バングラデッシュで印刷製本し、日本に運び込む形で、3年がかりでようやく出来上がった貴重な証言集です。

被団協（日本原水爆被害者団体協議会）代表委員の岩佐幹三さん、被爆医師で元被団協中央診療所所長の肥田舜太郎さん物理学者の沢田昭二さんを始めとして、石川県、宮城県・千葉県・東京都など、全国各地の被爆者団体等で活動している広島被爆者たち17名の被爆体験が、ベンガル語と日本語とが併記される形で並んでいます。

先日、お二人でバングラデッシュ大使館を訪問してマスード・ビン・モメン駐日大使とも面談したのですが、大使もたいへん喜んで、今後、協力するという嬉しいコメントもいただいたとのことです。

原爆が投下されて68年になろうとしています。被爆者の平均年齢は77歳、被爆者に残された時間はもう多くありません。「ふたたび被爆者をつくるな」「核兵器のない平和な社会」の実現こそが被爆者たちの願いです。この本を通じて被爆の実相が少しでも広く伝わるといいなと思います。

そうしたことこそが、平和への一番の近道と考えるからです。この本を通じて、多くの方たちが、被爆者の心からの訴えを受け止めていただくことを願っています。

1冊、日本=1500円・海外=20ドル・バングラデッシュ=200Tk（効）の定価になっていますが、1200円で頒布しています。

【連絡先】 上田紘治 携帯:090-6197-5354 E-mail:ueda@link.nir.jp